

中高生と スマホの功罪

～移り変わるコミュニケーション～



青少年の携帯電話所持率が中学生51・8%、高校生98・1%。そのうち、スマートフォン（略してスマホ）の割合は中学生25・3%、高校生55・9%と普及が確実に進んでいます（内閣府の平成24年青少年のインターネット利用環境実態調査から）。近年、スマホを媒介とした事件やいじめがメディアで多く取り上げられ、スマホの普及に漠然とした不安や不信が広がっています。京都でも、平成25年11月12・13日に内閣府主催の「青少年のインターネット利用環境作りフォーラム」が京都パルスパラザで実施されたほか、スマホの功罪を巡って全国的な運動の機運が盛り上がっています。

インタビュー 1

今、青少年たちの間で何が起きているのか、京都市内小中学校現場の取り組みについて、京都市教育委員会指導部生徒指導課石井大記、油谷昇両指導主事に話を聞きました。

事件に巻き込まれる中高生

スマホ関連の問題は京都市教育委員会でも大きい問題と捉えています。スマホ機能のなかでも、カメラとネット環境の普及で日常のようすを面白おかしく投稿し、人権侵害やいじめにつながる事件や、アプリのGPS機能を利用したストーカー事件、プロフィールを偽って近づくと「なりすまし」といわれる、わいせつ事件が発生しています。ネットに上げた情報は簡単に転載できる（魚拓と呼ばれる）ため、脅しの道具として使われるなど、より深刻なダメージを与えています。

学校での取り組み

京都市ではPTAも含めてスマホを含む携帯は必要ないと全市立小中学校で持ち込みを禁止しています。中学校の生徒会も動き出しました。ここ3年続けて全中学校を8つの地区に分け、その代表が会議する生徒会サミットで規範意識を育むことや、日々の生活のなかで様々な問題も意識しながら、「いじめは、しない！させない！許されない！」など9つの宣言を立て、問題の解決にも取り組んでいます。また、教育委員会では京都府警と小中高総合支援学校が担任と連携し、非行防止活動に努めています。

家庭への取り組み

青少年が関わるスマホ関連の問題を語る時、家庭での青少年との向き合い方も見逃せません。保護者がどれだけ子どもとやりとり出来るか。スマホを持つことで急速に情報世界が広がり、たった一晩で人間関係が壊れてしまふ。そういう世界がスマホにあることを、特に保護者に伝えることが私たちの使命の一つと思い、携帯を持つ子どもが急増する前の小学校6年生の保護者を対象に説明会を行うこともあります。

情報社会におけるスマホ

ネットいじめに関しては「ネットツールを持つからダメなんだ」「親が持たせるからダメなんだ」という人もいます。

しかし、現実問題、情報社会が急速に展開している中で、携帯電話を持たせないという選択はあまり現実的ではないように思います。そういうところを踏み越えた議論が大事だと思います。ラインなんかはすごく利便性のあるツールで、災害時には人の命を救うこともできる。一方で、間違った使い方をすると、子どもの命を縮めたり、いじめや人権侵害のツールにもなったりする。ネットツールを使う上での、社会啓発やルール作りをする必要があると思います。

インタビュー 2

スマホ問題をはじめ、移り変わるコミュニケーション。特に学校で起こる諸問題について佛教大学教育学部長の原清治教授をインタビューしました。



ネットいじめと依存、 スマホに「ネイティブ」な若者の価値観

学校の子どもの間にはカースト（序列制）があります。序列の低い子どもに向かって、ふざけとか冗談半分が長じた「いじり」が行われています。また、子ども達は返信の速度で人間関係の濃淡を使い分けることができます。大切な相手には早く返信をし、それによって関係性の順番、カーストが作られていくこともあります。デジタルな世界に「ネイティブ」な子ども達は、そういった中で楽しい思いをしたり、つらく悲しい思いをしているのです。

規範の低下と人間関係の復権

家庭でも学校でも、ご飯時には携帯電話を触らないとか、「ネットルール」が必要だと思えます。家庭にネットルールがない、モラルが低いという現状を打開するためにも「規範力」を育むことに意味があると考えています。子どもだけでなく、親も守る必要があります。また、ネットツールでいじめられている子は、確実にメッセージを出します。突然、携帯電話を触らなくなるとか。そういうサインが出た時に、親子関係の中に、いじめられていることを話せる関係があるかどうか重要です。

先生方は「自分たちがネットツールを知らない」と言わない方が賢明です。先生がラインを知らないと言ってしまうと、子どもは自分たちの生活世界に先生が入ってこないというお墨付きを与えてもらったも同然なのです。先生が、子どもたちの世界にアンテナを張って、どれくらいの子どものたちが携帯を持っていて、どのようにラインをしているのかを知っているだけでも全然違います。大人たちがみんなでもっと子どもたちの世界に接近していくべきなのです。放任して、子どもたちが手の届かないところに行くような、どうしようもない状態にならないようにしたいものです。

（下京青少年活動センター ユースワーカー 岩見晃宏）